

鷗外記念館へ

(<http://moriogai-kinenkan.jp/>)

150年目の鷗外 —観潮楼からはじまる—

2012年11月1日(木)～2013年1月20日(日)

開館最初の記念特別展では、鷗外記念本郷図書館、本郷図書館鷗外記念室の頃より文京区が大切に保管してきた鷗外資料を中心に、鷗外の生涯と観潮楼での日々を展示しています。

12日(土)10時30分 白山駅から

森鷗外、文久2年(1862年1月19日)～大正11年(1922年7月9日)

森鷗外は若いときから歴史に打ち込む一方で、すぐれて「現代」の人でもあった。激変する社会で生きる足場を一つひとつ組み立てる一方で、自分の思考と感受性をかき消さないかたちで生涯、日本と世界の「今」を追求し続けた。ドイツ留学を終え、恋愛の挫折、国家への志向を抱き合わせるようにして記したのが「舞姫」である。明治も末期へくると、女性の自立への希求を込めて「雁」を執筆した。

自国の歩みを一步先から見わたし厳しくもクリエイティブに描いた彼の感覚に近づける、世界のなかで日本がどう現れ、変化したかを見届ける。

白山駅→向ヶ丘2丁目交差点→

団子坂、森鷗外記念館(千駄木町21 観潮楼)

→藪下通り→漱石猫の家(駒込千駄木57)

鷗外明治23年～、漱石明治36年～ 居住

→根津神社→本郷弥生(本郷館)→

漱石西片町10ろ7(1-12-13) 転居 明治39-12-27→

白山下。

(鷗外年譜)

| | | |
|-------|-----|------------------------------------|
| 1862年 | 0歳 | 1月19日岩見国鹿足群津和野に誕生、藩の御典医の森静男と峰子の長男 |
| 1872年 | 10歳 | 上京(東向島) 西周邸に寄宿し、進文学舎に通学、ドイツ語を学ぶ |
| 1874年 | 12歳 | 東京医学校予科に入学 |
| 1876年 | 14歳 | 医学校の寄宿舎生 |
| 1877年 | 15歳 | 東京大学医学本科生 |
| 1881年 | 19歳 | 東京帝国大学医学部を卒業 陸運省に陸軍軍医副として勤務 |

- 1884年 22歳 陸軍省の命でドイツに留学、
先進医学、衛生学、文学、哲学、社会思想を学ぶ
封建人から近代人、国際人へ
新しい国家建設、自由恋愛
- 1888年 26歳 ドイツから帰国（石黒忠恵（ただのり））
陸軍軍医学校兼陸軍大学校教官
- 1889年 27歳 赤松登志子と結婚
東京美術学校嘱託講師
新声社結成
『しがらみ草紙』創刊
『於母影』
- 1890年 28歳 『舞姫』で文壇デビュー
石橋忍月と論争
登志子と離婚
- 1891年 29歳 医学博士
坪内逍遙と没理想論争
『文づかい』
- 1892年 30歳 慶応大学嘱託講師
『即興詩人』
- 1893年 31歳 陸軍軍医学校校長
- 1894年 32歳 日清戦争により釜山に赴き大連等に移動
- 1896年 34歳 『めざまし草』創刊
- 1898年 36歳 近衛師団軍医部長兼陸軍軍医学校校長
- 1899年 37歳 小倉十二師団軍医部長。クラウゼヴィッツの「戦争論」翻訳
- 1903年 40歳 荒木志げと再婚
『芸文』『万年艸』創刊
- 1904年 41歳 日露戦争により満州へ
- 1907年 45歳 陸軍軍医総監になる。観潮楼歌会（与謝野寛、伊藤左千夫、
佐々木信綱）
- 1909年 47歳 文学博士
『半日』
『キタ・セクスアリス』
- 1910年 48歳 『青年』
- 1911年 49歳 『妄想』『雁』
- 1912年 50歳 「ファウスト」翻訳、『興津弥五右衛門の遺書』
- 1913年 51歳 『阿部一族』

『大塩平八郎』
 1914年 52歳 『安井夫人』
 1915年 53歳 『山椒大夫』
 『最後の一句』
 1916年 54歳 母峰子死亡
 『高瀬舟』『寒山拾得』
 『渋江抽斎』『伊沢欄軒』
 1917年 55歳 帝室博物館総長兼図書頭、『北条霞亭』
 1919年 57歳 帝国美術院長
 1922年 60歳 7月9日死去

(観潮楼)

千駄木町 57 明治 23 年～
 千駄木町 21 明治 25 年 1 月 18 日～
 史伝 「細木香以」観潮楼
 明治 37 年 3 月～明治 39 年 1 月 日露戦争従軍

(鷗外、漱石の遭遇)

M29-1-3 根岸正岡子規宅句会で会う
 それ以前の M24-8-3 漱石は、鷗外ドイツ三部作を読み子規に手紙を書く。
 鷗外、M38-12 「吾輩は猫である」を読む？。
 M40-11-25 上田敏欧州留学壮行会で会う
 M41-4-18 反自然主義 第 3 回青掲会に二人とも主賓として招かれる
 M42-1-19 文部大臣招待会
 など 4 回ほど合っている。

M44 鷗外「漱石論」

鷗外、「泪滴」を漱石に送る
 漱石、返礼に「門」を送る
 他書簡 9 通など

鷗外は漱石を意識した
 漱石の活躍に技ようを感じてた
 吾輩は猫である、坊ちゃんに
 即興詩人、キタ・セクスアリスで
 三四郎×青年など

(舞姫について)

作品モチーフ：太田とエリスの恋、帰国を斡旋、仕向けたした親友相沢の行為に対する感謝と恨みとの混淆とした複雑な気持ちをどうする事も出来ずもたえ苦しむ。

鷗外：明治 17 年～21 年、ドイツ留学、帰国後、エリスのモデル来日（エリーゼ・ヴァイゲルト）、単なる契約妻か、婚約者エリスか、——>ドイツへ返す

(通説)

恋人を捨て出世のため帰国した情けない男

鷗外を追って来日した鷗外の恋人は、単なる「契約妻」

小金井良精日記、喜美子「思い出」説

エリスは「路頭の花」、その関係は単なる行きずり

成瀬正勝 「国語と国文学」昭和 47 年「舞姫異説」

鷗外は親が許せばエリスと結婚するつもりだったという鷗外悔恨の書である。

星新一「祖父小金井良精の日記」からエリスと小金井との折衝を明らかに

竹盛雄「鷗外全集月報」に鷗外と行動を共にした石黒忠恵の日記からエリス事件と赤松登志子との結婚に関する部分の全貌の公開

中川浩一、沢護、横浜で発行されていた英字新聞の横浜出入国の船舶の船客名簿から、エリスの本名と来日の日付を発見する決めてはなく、昭和 56 年、朝日新聞記事で、鷗外の舞姫エリスのモデル、本名はミス・エリーゼ・ヴィーゲルト、独身、来日 9 月 12 日、そして 10 月 17 日 横浜を出港を確認したと。

金山重秀・成田俊隆「来日したエリーゼの証明、舞姫異聞の謎解き作業の経過」

——>ミス・エリーゼ・ワイゲルト 乗船記録、エリーゼを「路頭の花」扱いのは妥当でない。

鷗外にとって「女神」であったエリーゼ

エリスとの別離をめぐる論議

その後

「鷗外の恋 舞姫エリスの真実」 乗船名簿 六草いちか

「鷗外の恋人 120 年後の真実」 モノグラム 今野 勉 演出家

「舞姫」は鷗外、近代的自我の発露、鷗外悔恨の書

(参考書)

森まゆみ 鷗外の坂 千駄木の漱石

吉野俊彦

挫折からの脱

ドイツ官費留学、軍費留学へ

近代医学、文学、哲学、自由恋愛と現実状況の乖離

医学と文学の啓蒙、キャリアに対する無為の批判される、

小倉へ転勤 軍医と文学者——小倉日記

創作断念

不満からの脱却

翻訳

哲学的な基礎づくり

フランス語を学ぶ、

レジグネーション（諦めの哲学）

日記再興

戦争論、グラウゼビッツ

虚無と理想

史伝執筆の動機

陸軍引退と「渋江抽斎」にかける熱意

「渋江抽斎」に託された鷗外の心境

漱石と鷗外（同時代、反自然主義、理想主義文学）

職業作家と軍人

（主な作品）

青年

妄想

史伝 渋江抽斎

伊沢欄軒